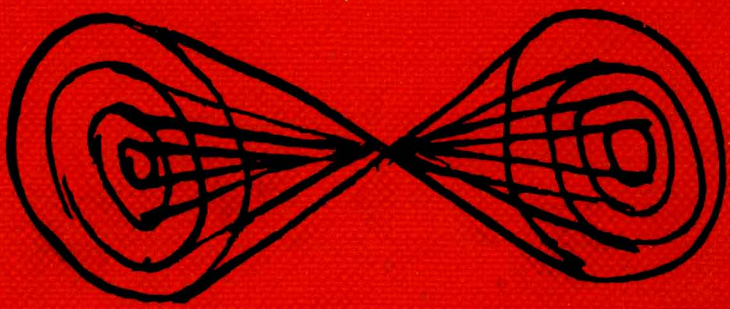

文学論集

フェヌロン　ディドロ　スタール夫人　ユゴー
スタンダール　ゴーティエ　フロベール　リヴィエール　ジイド　ブルトン　ロマン　サロート　ロブ＝グリエ　ドライデン　ワーズワス
コウルリッジ　シェリイ　アーノルド　ペイタア　V・ウルフ　リチャーズ　ゲーテ　シラー
F・シュレーゲル　フロイト　カイザー　シュタイガー　T・マン　エンツェンスベルガー
ホイットマン　ブルックス　E・ウィルソン
テイト　マシセン　ベリンスキイ　チェルヌィシェフスキイ　ツルゲーネフ　ピーサレフ　ドストエフスキイ　メレシュコフスキイ　ゴーリキイ　クローチェ　オルテガ　ルカーチ

福井芳男　小場瀬卓三　加藤晴久　松下和則　小林正
田辺貞之助　山田爵　渡辺一民　中山真彦　稲田三吉
川崎竹一　白井浩司　高畠正明　小津次郎　前川俊一
高橋康也　上田和夫　青木雄造　吉田健一　大沢実
岩崎宗治　氷上英廣　野島正城　登張正実　国松孝二
山本明　巻田収　佐藤晃一　生野幸吉　酒本雅之
斎藤光　谷口陸男　安藤一郎　大橋健三郎　藤井一行
北垣信行　佐々木彰　飯田規和　米川哲夫　佐藤純一
野上素一　岡照雄　森川俊夫　藤本淳雄　訳

世界文學大系

世界文学大系 *96*

文学論集

昭和40年11月5日発行

編　者　小林　正・平井正穂
佐藤晃一・西川正身
木村彰一

発行者　古田晁

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123　電話（291）局 7651

目次

言葉を豊かにする計画　フェヌロン　福井芳男訳　9
詩法の計画　フェヌロン　福井芳男訳　11
リチャードソン頌　ディドロ　小場瀬卓三訳　17
北方文学と南方文学　スタール夫人　加藤晴久訳　27
『クロムウェル』の序文（抄）　ユゴー　松下和則訳　32
ウォルター・スコットと『クレーヴの奥方』　スタンダール　小林正訳　40
『モーパン嬢』の序文　ゴーティエ　田辺貞之助訳　43
初稿『感情教育』より　フロベール　山田裔訳　67
冒険小説論（抄）　リヴィエール　渡辺一民訳　76

『ルネッサンス』の結論　ペイター　吉田健一訳　199
現代小説　V・ウルフ　大沢実訳　202
詩の分析　リチャーズ　岩崎宗治訳　208
詩における劣悪　リチャーズ　岩崎宗治訳　218
文学のサンキュロティスム　ゲーテ　氷上英広訳　225
叙事詩と戯曲について　ゲーテ　氷上英広訳　228
若い詩人たちのために　ゲーテ　氷上英広訳　229
さらに一言若い詩人たちのために　ゲーテ　氷上英広訳　231
悲劇における合唱団の使用について　シラー　野島正城訳　233
ゲーテの『マイスター』について　F・シュレーゲル　登張正実訳　239

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

言葉を豊かにする計画　フェヌロン　福井芳男訳　9
詩法の計画　フェヌロン　福井芳男訳　11
リチャードソン頌　ディドロ　小場瀬卓三訳　17
北方文学と南方文学　スタール夫人　加藤晴久訳　27
『クロムウェル』の序文（抄）　ユゴー　松下和則訳　32
ウォルター・スコットと　スタンダール　小林正訳　40
『クレーヴの奥方』　ゴーティエ　田辺貞之助訳　43
『モーパン嬢』の序文　フロベール　山田爵訳　67
初稿『感情教育』より　リヴィエール　渡辺一民訳　76
冒険小説論（抄）

「純粋小説」をめぐって　ジイド　中山真彦編訳　94
シュールレアリスム宣言（抄）　ブルトン　稲田三吉訳　101
『善意の人々』序　ジュール・ロマン　川崎竹一訳　109
不信の時代　サロート　白井浩司訳　116
未来の小説への道　ロブ＝グリエ　高畠正明訳　123
劇詩論（抄）　ドライデン　小津次郎訳　129
『抒情民謡集』序文　ワーズワス　前川俊一訳　141
シェイクスピア論　コウルリッジ　高橋康也編訳　152
詩の擁護　シェリー　上田和夫訳　164
現下における批評の任務　アーノルド　青木雄造訳　182
『ルネッサンス』の序　ペイタア　吉田健一訳　196

『幼年時代および少年時代』 チェルヌィシェフスキイ 北垣信行訳 376
『Л・Н・トルストイの軍隊短篇小説集』 ツルゲーネフ 佐々木彰訳 386
ハムレットとドン・キホーテ ピーサレフ 飯田規和訳 398
バザーロフ（抄） ドストエフスキイ 北垣信行訳 414
プーシキン メレシュコフスキイ 米川哲夫訳 427
十九世紀後半のロシア文学における新しい観念論の端緒 ゴーリキイ 佐藤純一訳 440
ソヴェト文学（抄） クローチェ 野上素一訳 453
詩論（抄） オルテーガ 森川俊夫訳 463
芸術から人間を追い払う（抄） ルカーチ 藤本淳雄訳 475
知識人の責任について

健康な芸術か病的な芸術か？　ルカーチ　藤本淳雄訳　480
解説　福井芳男・清水徹　平井正穂・佐藤晃一　大橋健三郎・北垣信行　487

装幀　庫田叕

文学論集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

言葉を豊かにする計画[1]

フェヌロン
福井芳男訳

ここに、熱意のあまり、一つの提案を、かくも賢明なアカデミーに差し出してみようと思う。わがフランス語は、多くの単語、文章を欠いている。およそ百年このかた[2]、言葉を純化しようとして、言葉をしばりあげ、貧しくしてしまったように思われる。確かにそのころ、フランス語は、少し醜く、あまりにも言葉が多かった。だが、マロ、アミョ、オサ枢機卿[3]の作品、最も陽気な、また、まじめな作品の中に、古いフランス語を見つけると、古語を惜しむ気持が起こる。古語には、何かしらな短い、自然な、大胆で、生々とした、それに情熱的なものがある。わたくしが間違いなければ、導入した以上に、言葉を切り落としたのである。ところでわたくしは、何も失いたくないし、新しい言葉を獲得したいのである。わたくしたちに欠けていて、やわらかい音をし、他の意にとられる危険のない、新しい言葉はみな認めたいと思う。

言葉の意味をこまかく検討すると、完全に互いに同義語というのはほとんどない。二つ目の単語を付け加えないかぎり一つの対象を十分指示できない言葉が多い。それゆえ、まわりくどい言い方をしばしば用いることになってしまう。各々の対象、感情、行動を表現するための簡単で適切な言葉を与えて短くしなければならない。わたくしはただひとつの対象にいくつかの同義語すらも欲しいと思う。すべてのあいまいさを避け、文章に変化をもたせ、そのいくつかの同義語のうち、話の他の部分と一番音がよくひびく言葉を選んで、調和を容易にする手段である。

ギリシャ人たちは、パントクラトール（全能）、グラウコピス（輝かしい眼）などの合成語を多く作っていた。ローマ人は、この点では自由が少なかったが、それでも少しギリシャ語をまねしたのである。マレスエダ（悪しき忠告者）等。この合成は、文を短くし、詩句の素晴らしさを容易にするのに役立ったのである。おまけに、彼ら（ギリシャ人）は遠慮なく、同じ詩の中に数々の方言を集めて、韻律を変化させ、容易にしたのである。

ローマ人は、自分のところには欠けている外国の用語で、自分の国語を豊かにした。たとえば、ローマでは遅く始まったため、ラテン語には哲学における適切な用語に欠けていた。ギリシャ語を習って、諸学問に関し論理だてるための用語を借りたキケロも、言葉の純粋性には非常に細心であったけれども、自由に必要なギリシャ語を用いている。まずギリシャ語の言葉は外国語としてしか考えられない。それを用いる許可を求め、つぎに許可が所有になり、権利にかわるのであった。

聞くところによると、英国人[4]は自分たちに便利な言葉を何も拒まないということである。見つけられるところ至る所で、とってくるのである。英国の隣国ではこういった掠奪は許している。この点については、すべてはただ慣用によってあたりまえになるのである。言葉は音でしかなく、それを人は勝手にわれわれの思考の記号としているのである。これらの音はそれ自身には何らの価値もない。貸した国民にとっても借りる国民にとっても同じことなのである。一つの単語が、われわれの国で生まれようと外国から来ようと、それが何であるのだろう。唇を動かし、空気を打つやり方でしかない問題に、嫉妬[5]は全く子供じみているだろう。

それに、この偽りの名誉心の問題で何も遠慮することはない。フランス語が、ギリシャ語、ラテン語、ツデスク語[6]、それにゴーロワ語の漠然たるいくつかの残りとの混合でしかない[6]。われわれが、これらの借用の上にのみ生きており、その借用がわれわれの固有の基本財産になっているからには、われわれが豊かになるのを達成し得るような借用の自由に対し、悪い恥辱感をもつことがあろうか。フランス語を、もっと明快に的確に、短く、調和のとれたものにするために、必要なものはすべてあらゆる方角からとろうではないか。遠廻りの言い方は、話を弱めるのである。

趣味、判断力の十分たしかな人々が、われわれの承認すべき言葉を選ばねばならないということはまことである。ラテン語の単語が、選ぶのに最も適しているように思われる。その音はやわらかく、すでにわれわれの基本資産に根をおろした他の言葉と関連しているし、耳もすでになれている。われわれのところに入ってくるのにもう一歩すすめばよいだけである。それらの言葉に快い語尾を与えねばなるまい。言葉の移入を偶然や、無知の俗人、あるいは女性の流行にゆだねると、望ましい明快さも、やさしさもない多くの言葉が入ってくる。

認めるべきことは、われわれがいそいで、選択もせずに、多くの外国語をフランス語に投入したならば、フランス語を、まったく本質の違った他国語の、粗雑で不恰好な堆積にしてしまうであろうということである。ほとんど消化されていない食糧は、人間の血の大部分に異質の部分をもたらし、人間を養うどころか、害してしまうのである。われわれの国民と同じくらいに古い野蛮な状態から、やっとぬけ出したところであることを思い出さねばならない。[7]

おそらく、アカデミーは新しい言葉のために掲示で勅令を発する権利はなく、一般が反逆するであろうと言われるかもしれない。……だが一般は、注意深くやればアカデミーに好意を持つであろう、英国人が毎日していることをなんでわれわれがやりとげ得ないであろうか。

一つの言葉が欠けていて、われわれがその必要を感じているとする。そうしたら、やわらかい、[8]すべてあいまいさのない、またわれわれの国語に適合し、話を短くするのに便利な音を選ぼう。各自がまず便利さを感ずる。四、五人の人が、つつましやかに、私的な会話で使ってみる。新しさを好んで、他の人々がそれをくり返す。その言葉はそれで流行になるのだ。かくして、野原に開く小道は、昔の道がでこぼこして近道でなくなると、いちばん人の通る道に、やがてなるのである。

簡単で新しい言葉のほかに、いっしょに置かれつけていない言葉を結ぶ技術によって、優雅にみちた新しさを感じさせる複合語や文章も必要であろう……だがこの点においては、つつましく、慎重でなくてはならない。温暖な気候に生きる国民は、熱い国の人々よりも、きつい、大胆な隠喩を好まないものである。

精神が洗煉されているという評判の高い人々が、今までわれわれがもたなかった簡単な、あるいは比喩的表現を導入することにつとめるならば、わがフランス語は、じきに豊かなものになるであろう。

原題　PROJET D'ENRICHIR LA LANGUE

訳注

(1) フェヌロンの立場の独自性がここにあらわれているが、詳細は解題（一六ページ）参照。

(2) マレルブ以降の意味。マレルブは一六〇五年にパリに来、詩壇に君臨しつつ、強くフランス語の純化につとめた。

(3) クレマン・マロ（一四九五―一五四四）、フランソワ一世治下の詩人。アミョ（一五一三―九三）、プルタルコス『英雄伝』の名訳を著した。オサ枢機卿（一五三六―一六〇四）、外交官として著名、『書簡集』で国家、宗教の重要問題をあつかっている。

(4) 十七世紀末より、フランスの英国に対する関心は非常に強まってきている。

(5) ゲルマン語のことである。

(6) 本質的にはフランス語は、ラテン語の一つの変化であって、ギリシャ語は特に深い影響は与えていない。ラテン語移入以前のゴーロワ語も、地名農耕用具名にその跡を残しているだけである。

(7) この時代、すでに中世を野蛮な暗黒時代と見なすのが通念になっていた。

(8) 「やわらかい」「優雅な」という言葉をフェヌロンが多用していることに注意。フェヌロン自身の文体の特徴の一つである

詩法の計画

フェヌロン
福井芳男訳

詩法を有することは修辞法の書[1]に劣らず望ましいと思われる。詩は一般が考えるよりも、まじめで有用なものである。人類発生以来キリスト教は、自らの用に詩を用いたのである。人間が神による聖書のテキストを有する以前から人間のそらんじていた聖なる詩篇が、世界の起源や神のすばらしいみ業の記憶をとどめたのである。モーゼの二つの詩篇の壮麗、熱烈に匹敵するものはない。ジョブ記ははなはだ大胆で堂々たる修辞にみちた詩なのである。ダビド詩篇は、優雅さと愛情をもって、夫たる神と、妻となる人間の魂との神秘的結合を表現している。聖歌には、真の神が知られ、感ぜられる。いかなる時代、いかなる国民の間にも、讃嘆の的であり、慰めであろう。聖書全部が、詩形式がまったくみとめられぬ部分においてさえも、詩にみちているのである。

そのうえ、詩は、この世界に始めて則を与えたものである。野蛮で残忍な人間を、柔和にし、彼らが散在し、漂泊していた森の外に引き出して集め、文明化し、習俗を正し、家族、国民を作り、社交のやさしさを感じさせ、理性の使用を招き、徳を養い、美術を発明させたのは、みな詩なのである。戦争に対する勇気を高め、平和に際して勇気に中庸を保たせたのも詩なのである。

……

生々したイメージ、堂々たる修辞、情念の昂揚、さらには調和の魅力により生命を与えられた言葉は、神々の言語と名づけられたのである。もっとも野蛮な民でさえも、その言葉に感ぜずにはいなかった。悪い詩人は軽蔑するべきであるが、それだけまた、無益な栄光を得るために詩を気のきいた遊びにすることもなく、人間を叡智、徳、宗教の方にたかめるのに詩を用いる大詩人を称嘆し、尊重すべきなのである。

ここで、私の心を悩ますことを申しのべてよいであろうか。それは、フランスの韻律法を完全に達成することがほとんど不可能に思われることである。この考えを確信させるものは、わが国の最も優れた詩人たちも多くの弱い詩句を作っていることである。マレルブ[2]よりも美しい詩を作ったものはいないが、そのマレルブでも、彼にふさわしくない詩句をいくつ作ったことであろうか。もっとも尊敬すべき詩人たちの中で、いちばん出来不出来の少ない者も、かなりしばしば、たどたどしい、あいまいな、また、だれた詩句を作っている。彼らは、思考に微妙な言い廻しを与えようとしたが、その思考そのものを探さねばみつからない若干の詩句を切りとっても、いかなる美しさも切りはなしてはいない。この詩人たちの詩を厳密に検討すれば、苦もなく気がつくことなのである。

私の判断に誤りがなければ、われわれの詩法は韻によって、利益を得ているよりは、むしろ失うところが多いのである。多様性、容易さ、調和を多く失っている。詩人がかなり遠くまで探しもとめに行く韻によって、しばしば、話を長くして、だれさせるようにしてしまう。自分の必要な一つの詩句を導くためにあとから二、三の詩句を付け加えざるを得なくする。豊かにひびく韻だけ使うことに細心になって、思想、感情の奥、言葉の明快さ、自然な言い廻し、表現の明晰さについては、細心ではない。韻は最後のとめの単調さしか与えない。これは退屈なもので、散文では避けるくらいで、耳に心地よくないのである。最終シラブルのこの繰り返しは、二つの男性韻[3]が常に二つの女性韻によって従われる英雄詩[4]の中においてでも、飽きさせるのである。

韻が交錯して、ずっと調子、変化のあるオードやスタンス[5]において、もっと調和があることは確かである。しかし、最も優しく、また最も多様な、また最も壮麗な音を要求するのにしばしばこの完成さが、いちばん少ない詩句なのである。

不規則詩[6]は、オード同様韻が交錯している。おまけに、単調な規則のないその詩句の音脚数の不定は、語調を高めるか下げるかという意志

に従い、その長さ、調子を変化させる自由を与えている。ラ・フォンテーヌは、この詩句をたいへんうまく用いたのである。

とはいっても、韻を廃止しようということはできない。韻がなくては、われわれの詩作法は失墜してしまうであろう。わが国では、ギリシャ語やラテン語において詩脚の規則、詩句の長さの代りになる長短の多様性がない。しかし、詩人たちが韻に関して、もうちょっとゆったりとして、意味や調和について、もっと正確になる手段を与えるのがよろしいと思うのである。韻を少しゆるやかにすれば理性をもっと完全にするであろうし、もっとたやすく、美、偉大さ、単純さ、容易さを目途することになろう。大詩人たちが、無理な言い廻し、あとで縫いつけた形容、見たときに十分はっきりとはわからない思想などの欠点を免れ得るであろう。

ギリシャ・ラテンの例は、こういう自由な態度をとる勇気をわれわれに与えてくれる。古典の詩作法は、比較のしようもなく、われわれより窮屈でない。韻一つだけで、すべての古典の規則よりもむずかしいのである。それでもギリシャ人は、さまざまな方言に助けを借りている。おまけにギリシャ人もローマ人も、詩句を満たすため自由に調節できる余計なシラブルを有していたのである。ホラチウスは、その諷刺詩、書簡詩、さらには若干の頌歌(オード)においてさえも、詩法を自由に扱ったのである。これほどまでに面倒で、よい詩人の熱意を減らし得るような韻律法を持っているわれわれが何故同様なくすりを求めないのであろうか。

ほとんどすべての文章の倒置を排するフランス語の厳格さは、また無限に、フランス語の詩句を作る困難さを増大している。作品を作るために、一種の拷問状態においたのであるが、これはまったく無駄であった。美よりもむしろ難を求めたと思いたくなるのである。わが国では、詩人は、偉大な感情、生々とした描写、大胆な筆致などと同じくらい、一つのシラブルの配置を考える必要がある。逆に古典作家は、しばしば倒置を行なって、美しい調子、多様さ、情熱的表現を容易にしたのである。

……

フランス語に、こういった倒置を多く導入してはならないことを認める。まったく馴れていないので、固く、あいまいさにみちているように思われよう。デプレオー氏[7]のピンダロス風頌歌(オード)[8]も、この欠点を免れていないように思われる。他でこの大詩人の作品を称嘆しているからこそ、自由に、そういった点を指摘するわけである。段階的に、耳にやわらかく、またすでにフランス語で認められている倒置に近いものから選ばねばならぬであろう。たとえば、フランス人はすべて次の倒置に賛意を表している。

そこに失われたり地の主人たる名は、
……
かつ倒れたり　彼らと共に
運命が、彼らに
仕えるものとした

なべての人々は、

ロンサール[9]は、突然、あまりにも大胆に試みたのだ。大胆すぎ、また晦渋すぎる倒置で、フランス語に無理をさせた。その時フランス語はたしかに熟さない、単調な言語であった。そこに、国民の用にまだ導入されていない合成語を付け加えすぎたのだ。フランス人の意図に反し、ギリシャ語でフランス語を話したのである。わが国の言葉を豊かにし、詩を大胆にし、生れつつあった韻律法を束縛から解放するために、なんらかの新しい道を試みたことは誤まってはいなかったと思う。だが言葉の点で、話をする相手の人たちの賛成なしでは、何ごとにもうちかてない。同時に二歩あゆむべきではなく、大衆に従われていないと知ったら、すぐたちどまらなくてはならない。かわっていることは、すべてにおいて危険である。ことに習慣にのみよることがらにおいては、許され得ない。

ロンサールのけしからぬ行きすぎが、われわれを逆の極端さへと投げこんだと言えよう。フランス語を貧弱にし、乾燥させ、せまくるしいものにした。文法の極度に細心で単一な方法に従う他には決して使われ得ない。いつもまず主語の名詞が来て、それが手をとるように形容詞をつれてくる。その動詞が必ずあとからやってきて、他のなにも間に入れられずに副詞がくる。それから、文法体系はすぐに目的語を呼んできて、それは動かすことができない。それが、精神の停止、すべての期待、驚き、変化、しばし

ば、すばらしい調子を排除してしまうのである。

他方では、いかなるあいまいな語法も試みてはならないということに同意する。普通は、クインティリアーヌス[10]とともに、読者が理解しても、そこに欠けているものを補わなければ理解しないこともあり得るような文章をすべて避けるべきだと言いたい。単純で、精確で、明快な、すべてがおのずから発展して、読者の方に迎えに行くような表現が必要である。一般に向かって話すとき、作家は読者に、いかなる苦労もさせないため、あらゆる苦労をしなければならないのである。すべての働きは、作家自身が負うものであり、その働きの果実と共に、すべての喜びは、作家が読まれたいと思う相手に与えられるものである。作家というものは、自分の思想を探しもとめるような点は何も残してはならない。何かの意味を包んで差し出す権利があるのは「謎」を作る者だけである。アウグスッス[11]は、話の中に何か晦渋な点を残す危険よりも、しばしばくり返すほうを求めたのである。事実、理解してもらうためにのみ書く人間の義務の第一は、最初から理解してもらって、読者の苦労を和らげることである。

わがフランスの大詩人たちでも、韻律法の厳格な規則に悩まされて、若干の部分では、この完全な明快さの段階に達していないことを認めざるを得ない。多くものを考える者は、多くを言いたがるし何を失うことにも心をきめかねる。みつけたことすべての価を感ずるのだ。そこで一詩句のせまい範囲内にすべてを閉じこめるために、非常な努力をする。ひとは多くの繊細さを要求するが、それは堕落して微妙すぎるものになってしまう、読者を眩惑し、驚かそうとしすぎるのであり、読者以上に才気を持とうとし、それを感じさせようとする。それで称嘆を奪おうとするのである。ところが読者以上に才気があるように見えてはならないし、さりげなく読者に才気を与えなければいけないのだ。単なる合理性、自然な優雅、最も生々とした感情、これらが真実の完全さを作るのであるのに、それでは満足せず、自分を愛するあまり、やや目的以上に進んでしまうのだ。美の探求において、つつましくすることを知らず、野心的な装飾の手前でぴったりと立ちどまる技術を知らないのだ。イタリヤのことわざにも言うように、最善に憧れて、善をうちこわしてしまう。少し塩をきかせすぎ、味をつけるのにぴりっとした味を与えようとする欠点に陥ってしまう。布地に、ししゅうをつけすぎる人たちのようなことをするわけである。最高の趣味は、すべてにおいて、才気さえも除外せず、すぎたものを嫌うのである。才気というものは、それをてらったり、乱用すれば、すぐげんなりとさせてしまう。大衆の才気に調和させ、わかりやすくするために、才気を切りとり得ることは、それだけ才気を持っていることなのである。天才のひらめき、思想のひろがり、豊穣さを最も多く持っている詩人が、この過度の才気という暗礁を最も恐れるべきなのである。それはりっぱな欠点、稀な、すばらしい欠点だと言う人があるかもしれない。私もそれに同意するが、それは真の欠点で、一番直しにくいものの一つなのである。ホラチウス[12]は、作家というものが才気そのものに対しても容赦なく、自分を批判することを望む。

判断正しき賢者は　力なき詩句を批判する
　　であろう
堅き　品なき詩句を非難しよう
黒く線をペンで　抹消し　大胆すぎる飾り
　を削除する。
明瞭ならざる詩句を　明快にするよう努め
　させよう。

すべての余計な飾りを捨てて、単純で、やさしく明快で、表面上は注意を払われていないような美に限定することで、多くを得るのである。詩においても、建築におけるように、必要な諸部品が自然な装飾にかわらねばならない。だが単なる装飾でしかない装飾は余計なものである。それを切りとってみても、何も欠けないので、虚栄心が傷手をうけるのみである。才気がありすぎて、いつも才気を持ちたいと思っている作家は、私をげんなりさせ、消耗させる。私はそんなに才気を持ちたいとは思わない。その作家が才気をもっと示さないようにするなら、私に息づかせ、もっと喜びを与えてくれるであろうに。緊張をつづけさせすぎて、その詩を読むことが研究になってしまう。それほどの閃きが私の眼をくらますので、弱い眼を休めるやわらかい光を求めるのだ。愛すべく、一般の人間につ

り合っていて、その人間たちのためにすべてを、自分のためには何もしない詩人を私は求めるのだ。非常に身近かで、和やかで、単純であるために、崇高さを見出し得る人間がほんの少数であるにもかかわらず、たやすく見出したのだと各自が最初から信じたくなるような崇高さを、私は欲するのだ。驚くべきこと、すばらしいことよりも、愛すべきものを私は好む。作家であることを忘れさせ、私と同じ水準で会話に入ってくれるような人間を欲する。眼の前に、収穫のためにおののく農夫、自分の村、自分の羊の群しか知らぬ牧童、赤ん坊にほろりとしている乳やる母を、眼の前に示してもらいたい。作家が、自分や自分の才気を考えさせず、話をさせている牧童のことを考えさせてもらいたいのである。

……

描くすべてに自分をつり合わせ、さまざまな性格のすべてに達するため、こうして自分を低めることは、何と偉大なことであろうか。才気と呼ばれるものの一部をかくすことを恐れない者は、いかにその才気よりも高くにいることであろうか。一つの作品が本当に美しくあるためには、作家がその作品で自己を忘れ、私にも作家を忘れさせねばならない。私ひとり、完全に自由にしておいて欲しい。たとえばウェルギリウスが消えて、私がこの美しい所を見るような気がしなければならぬ。

苔生いし泉、眠りよりなお甘き草[13]

……

ホラチウスによって描かれた、この他の場所にいる人々の幸せを、うらやむようであらねばならない。

高き松と白きポプラが、
その枝で優しき影を結びつけ、
曲りくねる川岸が
跳ね躍る早き流れを妨げるあの場所に、

私は、息をつかせてくれないうるさい才気よりも、この樹蔭、この小川の方に心を使ったほうがよい。魅惑が使い古されることが決してないという種類の作品がこういうものなのだ。読み直されて失う所があるどころか、常に、何度も要求されるのだ。これらを読むことは少しも研究にはならぬ。そこで休息し、疲れをいやさせるのである。輝かしい、こしらえ上げられた作品は、押しつけがましく、眼をくらませる。細い切先を持っていて、じきに鈍ってしまうのである。私が求めるものは、難かしいものでも、稀なものでも、すばらしいものでもない。私が味うのは、単純で、愛すべく、近づきやすい美なのである。牧場で踏みにじる花が、最も壮麗な庭の花と同じように美しい。私は牧場の花の方を好むのだ。何も誰にも、うらやましいとは思わない。美は、人間全部に共通だとしても、その価を何も失わないであろう。そのゆえにいっそう尊重すべきものになるのだ。稀少性は、自然の欠点であり貧困である。太陽の光は、全宇宙を照らすといっても、それでもすばらしい宝であるには違いない。新しさによって、私を驚かす必要のないような自然な美を私は欲するのである。その優雅さが、決して古くなることなく、ほとんどその美しさなしではすませないようになってもらいたい。

……

詩は疑いもなく模倣であり、絵画である。画をかいているラファエルのことを考えてみよう、彼は奇怪な形を作ることはさしひかえる、グロテスク風に画をかくときは別であるが[14]。まばゆい色彩は求めない。技術が明らかにあらわれるようにするどころか、それをかくすようにのみ努めている。見る者をあやまらせ、自分の画が、タボールの山で形をかえ給うたキリストそのものであるかのように思わせる。その画は、そこに真理が見出される限りにおいてよいのである。芸術は誇張されるとすぐ欠点だらけになる。似ることを目標としなければならない。チチアンの風景画の中で、断崖に傾いている小丘に登る山羊を見たり、テニエ[15]の画で村の饗宴や田舎の踊りを見てあれほど楽しみをおぼえるゆえ、オデュッセウスの中で人間生活の細部のあれほど素朴な描写を見るのを好むことに驚くべきであろうか。ホメーロスが描く場所にいて人々を見たり聞いたりするような気がする。この風習の素朴さは、黄金時代を引きもどしているように見える。善人ユーメ[16]は『クレリー』や『クレオパトラ』[17]の主人公より私の胸を打つのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com